奥州市埋蔵文化財調査センター 所報

鎮守府 胆沢城

第120号　令和7年5月20日発行

新連載

エミシとアイヌ［第1回］

文／専門学芸員　大堀秀人

◆はじめに

「エミシはアイヌなのですか？」、「エミシとアイヌはどういう関係なのですか？」…。

当センターで働いていると、ご来館の方々からよくこういったご質問を受けます。その都度、自分なりに説明しようとはするのですが、複雑で難しい問題だけに、なかなか上手く答えることができず、スッキリしないままお帰りになることもしばしばです。

そこで、今回の所報から「エミシとアイヌ」と題するコーナーを設けて、この問題について詳しく掘り下げてみます。今回は導入として議論の前提となる話を取り上げ、次回以降、いくつかのテーマでエミシとアイヌに迫っていきます。率直にいって、明確な結論を出すことが難しい問題ではありますが、様々な論点でエミシとアイヌ、そしてヤマト※1と対比させることで、考える手がかりを少しでも多く提供したいと思います。

※1　このコーナーでは、古代の日本人（倭人）の社会・文化などを指して「ヤマト社会」や「ヤマト文化」というように表記することとします。ただし、この〝日本人〟にしても、通時代的かつ均質な実体を認めることができるのか疑問視されています。

古代東北と北海道の歴史

私が「エミシはアイヌなのですか？」と聞かれたら、ひとまず「エミシはアイヌそのものではありません」とか、「エミシとアイヌは分けて考えてほしい」と答えるでしょう。古代東北のエミシと北海道のアイヌは、生活の場所が違うのはもちろんのことながら、社会集団としての歩みも異なります。以下、古代東北と北海道の歴史を概観してみます。（次ページ掲載の時期区分対象図も適宜ご参照ください。）

古代東北に住む人々※2が「エミシ」として認識されるようになったのは、6世紀代のこととされています。エミシたちは朝廷の支配には組み込まれず、独自の暮らしをしていましたが、645年の大化改新以降、朝廷は東北へ本格的に進出するようになります。当然、エミシたちとの間に軋轢が生まれ、時に激しい戦いが起きましたが、それも平安時代のはじめ頃にはひと段落つき、その後、長い時間をかけヤマト社会との融合が進みます。

一方の北海道ですが、本州の時期区分とは異なり、縄文時代の後は「続縄文文化」、次いで「擦文文化」が展開していきます。また、道東では「オホーツク文化」も形成されます。そして、本州が鎌倉時代となる13世紀頃に「アイヌ文化」期へ移行します。ただし、ここでいう「アイヌ文化」とは、あくまでも考古学上の命名にすぎず、民族としてのアイヌの成立とは別問題です。現在の研究では、続縄文文化や擦文文化も視野に入れた「アイヌ史」の構築が進んでいます。

以上、エミシとアイヌとでは政治的・社会的背景、そして成立過程に違いがあり、歴史学を学ぶ人間としては、両者を単純に結びつけることはできません。なお、私たちがイメージする典型的なアイヌ像は、江戸時代（近世）の和人側の記録に基づくものであり、その意味でも古代エミシとアイヌを安易に同一視するべきではないでしょう。

では、もう少し条件を緩めて、「古代の東北と同時期の北海道、あるいは後のアイヌ文化の生活様式との間に接点や共通性はあったのか？」と聞かれれば、話は変わってきます。また、エミシもアイヌも、ヤマトや和人側の史料では同じく「蝦夷」と記され、これが問題をややこしくしています。この辺りについては、次回以降詳しくみていきたいと思います。

※2　エミシの領域として、厳密には新潟平野―米沢盆地―阿武隈川河口を結んだラインが南限とされ、福島県域は入りません。

↘

↘

エミシをめぐる問題点

エミシとアイヌの関係を考える前に確認しておきたいのが、そもそもエミシがどんな人々なのかをめぐって、様々な見解があるということです。

エミシが何者かをめぐる研究史については、機会があれば取り上げたいと思いますが、エミシを政治的につくられた存在、さらには虚構とまで断じる見解もあれば、エミシの政治性は認めつつ、文化的・社会的な独自性を見出そうとする見解もあります。

それに、東北地方は南北に長く、地域ごとの環境差が大きいわけですから、そこに住んでいる人々の実態を一括りに論じることには問題もあります。当然といわれれば当然なのですが、山間部・平野部・沿岸部の暮らしはそれぞれ違いますし、日本海側と太平洋側、北東北と南東北でも差は大きいのです。これらに加え、ヤマトとの接触度といった観点も加わることになります。

このコーナーでは、ひとまずエミシについてのオーソドックスな理解に基づいて論じていきますが、エミシとアイヌを問う前に、エミシ自体が論争の渦中にあるということは、認識してもらいたいところです。

時期区分対象図

<table>
<tr><th>年代（西暦）</th><th>本州の時代区分</th><th colspan="2">北海道の時代区分</th></tr>
<tr><td rowspan="2">B.C.300頃</td><td>縄文時代</td><td colspan="2" rowspan="2">縄文時代</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代</td></tr>
<tr><td rowspan="3">A.D.250頃
A.D.600頃</td><td rowspan="3">古墳時代</td><td colspan="2" rowspan="3">続縄文文化</td></tr>
<tr><td rowspan="3">擦文文化</td><td rowspan="2">オホーツク文化</td></tr>
<tr><td>A.D.700頃</td><td>奈良時代</td></tr>
<tr><td>A.D.800頃</td><td>平安時代</td><td>トビニタイ文化</td></tr>
<tr><td>A.D.1200頃</td><td>鎌倉時代</td><td colspan="2" rowspan="2">アイヌ文化【中世】</td></tr>
<tr><td>A.D.1330頃</td><td>室町時代</td></tr>
<tr><td>A.D.1600頃</td><td>江戸時代</td><td colspan="2">アイヌ文化【近世】</td></tr>
<tr><td>A.D.1870頃</td><td>明治時代</td><td colspan="2">（新政府による開拓）</td></tr>
</table>

※「B.C.」は紀元前の略、「A.D.」は紀元後の略

「人種」という用語について

ところで、エミシやアイヌについて、自然科学的な関心から両者の関係を聞かれることもあります。自然人類学による人間集団の研究は、現在に至るまで多くの重要な成果を挙げており、特に近年のDNA研究にはめざましいものがあります。もちろん、エミシやアイヌについても自然人類学的なアプローチが試みられています。これらの分野は筆者の能力の及ぶところでありませんが、機会があれば、どのような知見が得られているかぐらいはまとめたいと思っています。

ただし、少し気になるのは、エミシとアイヌについて「人種」という言葉を使って質問される方がいらっしゃることです。現代の生活の中で「人種」というワードを耳にすることは少なくありません。ですが、学術的な世界においては用語として問題のあることが認識されています。

一般的に「人種」とは形質的（身体的・遺伝的）な特徴によって人類を区分する言葉です。しかし、科学的には、「人種」と呼ばれてきた集団内の遺伝的変異は極めて多様であって、厳密には他の「人種」と明確に区別できるものではないとされます。ある「人種」から別の「人種」にどこで切り替わるのか、その線引きは不可能といってよく、とすれば主観的・恣意的なものになってしまいます。

また、人類には独断と偏見に基づく「人種」観から、多くのいまわしい事件を繰り返した歴史があります。ゆえに、現在の生物学的人類学や自然人類学では、科学的概念として「人種」という語を用いることはなくなってきています。

難しい話を長々と述べてきましたが、言いたいことは要するに、「人種」という用語には――それを使用するのならなおさら――気を付けてほしいということです。「人種」は人類の長い歴史の中でごく当たり前の感覚として定着してしまい、「人種主義」や「人種差別」といった社会問題は現代に至っても解決できずにいますが、その実、曖昧で危ういものなのです。

せっかくの機会なので、筆者が普段感じる違和感を率直に述べさせていただきました。（了）

【参考文献】
山下晋司・船曳建夫編『有斐閣双書　文化人類学キーワード［改訂版］』（有斐閣、2008年）
吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編『地域の古代日本　陸奥と渡島』（KADOKAWA、2022年）

奥州市の発掘調査速報

文／専門調査員　遠藤栄一

去る３月22日(土)、当センターを会場に令和６年度奥州市遺跡発掘調査報告会が開催され、多くの奥州市民、市外・県外の方々が参加されました。

令和６年度は、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより中林下遺跡(水沢)と中井遺跡(胆沢)、奥州市教育委員会により白鳥舘遺跡(前沢)の3遺跡の発掘調査が行われ、それぞれの担当者から興味深い報告がありました。

中林下遺跡は、水沢真城字中林下地内に所在し、すぐ西側には国道４号線が位置します。令和２年度から、５年間にわたって発掘調査が行われており、今までの調査成果を踏まえた報告がありました。古代では、平安時代の掘立柱建物40棟、竪穴建物９棟、池状遺構６基などがみつかり、掘立柱建物を中心とした役所的な性格を有する遺跡であることがわかりました。特に胆沢城と深く関連する遺跡であることが指摘されました。続いて、中世初頭の掘立柱建物１棟、渥美・常滑産陶器、中国産の白磁、かわらけが出土しており、奥州藤原氏に従う在地有力者の居所であった可能性が考えられます。そして戦国時代末期の居館跡が２箇所でみつかりました。40～50m四方を堀で囲み、その中には大小の掘立柱建物跡や池状遺構がありました。居館跡の年代は、出土した陶器から16世紀後半と考えられます。以上のように、遺跡は古代から中世にわたって長く営まれた痕跡が確認され、重要な地域であったことがわかりました。

中井遺跡は、胆沢南都田字中井地内に所在し、すぐ北側には胆沢川が流れる場所に位置します。発掘調査では、江戸時代の墓跡がみつかりました。墓跡は３基が確認され、１m前後の方形または隅丸方形の土坑墓で、木棺が残っている場所もありました。墓の中からは、人骨のほか、寛永通宝・煙管・櫛・３色のガラス小玉などの副葬品も出土しました。墓跡のほとんどが後世の削平によって失われていますが、おそらく埋葬された墓地の一部ではないかと考えられます。その他、江戸時代の水田跡もみつかり、人間の足跡や耕作痕が多数残されていました。中井遺跡の発掘調査は、今年度も継続実施される予定です。

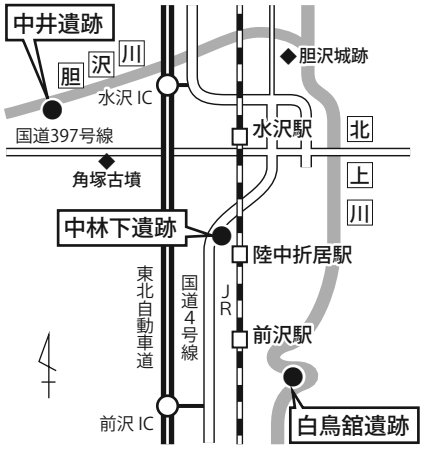
白鳥舘遺跡は、前沢白鳥舘地内に位置する国指定史跡です。令和６年度の第23次調査では前年度に引き続き、主郭区域の発掘調査が行われました。城館の主郭北側で中心建物の一部と考えられる柱穴がみつかった他、鍛冶炉跡や、塀や柵列といった区画施設と考えられる掘立柱列跡、15世紀頃のかわらけ・白磁・古瀬戸なども出土しました。調査成果から主郭には、北側に主要建物、南側には広場(平場)で構成される構造が判明しました。

会場には、中林下遺跡から出土した古代の土師器や須恵器などの土器、中井遺跡から出土した墓跡の副葬品(寛永通宝・ガラス小玉など)が展示されました。出土したばかりの新資料を参加者は興味深く見学されていました。　(了)

まいぶんトピックス

報告会　3/22(土)

令和6年度奥州市遺跡発掘調査報告会



(当日の様子)

埋文センター事業のご案内

鎮守府探訪講座 2025

全4回

第1回 6/1(日)

「大清水上遺跡（おおすずかみいせき）—集落の変遷について—」

講師：えさし郷土文化館
館長　髙橋憲太郎 氏

第2回 7/6(日)

第3回 8/3(日)

第4回 9/7(日)

●時　間／13：30～15：00
●定　員／各回45人
●受講料／各回400円（資料代込み）
＝事前申し込み制です。＝

お申込みは1回ごとにお願いします。各回申込受付開始日が違いますので、チラシ・ホームページ等でご確認ください。

詳細は、ホームページ・チラシをご覧ください。

体験学習会 古代の宝石 トンボ玉をつくろう＊

～自分だけのトンボ玉でストラップづくり～

7/19(土)
①10：00～12：00

7/20(日)
②10：00～12：00
③14：00～16：00

7/21(月・祝)
④10：00～12：00

●定　員／各回４人（全16人）
●対　象／小学４年生以上
●参加料／1,500円（保険料込み）
※参加料は前払いとなります。

6月19日(木)9：00から参加申込受付開始

（事業の日程・内容などは変更になる場合があります。詳細は、ホームページ・チラシ・市広報などでお知らせします。）

古代の生活にふれてみよう！ まいぶん出前体験隊

学校やこども会、団体など訪問して一緒に体験します！

出前体験隊メニュー

作ってみよう！

●勾玉づくり …… 600円/1人
●古代風アクセサリーづくり … 300円/1人
●アンギン編み …… 200円/1人
●お守りづくり …… 300円/1人
●牛乳パックで羽子板づくり … 300円/1人

やってみよう！

●弓矢体験 …… 1,000円/1クラス
●火起こし体験 …… 1,000円/1クラス
●平安の遊び体験 … 1,000円～/1クラス

※詳しくは別途チラシをご覧いただくか、直接お問合せください。

歴史のおはなしを聞く体験 まいぶん出張講座

講師派遣

本物の土器にさわってみよう

子どもたちに向けて、わかりやすい言葉でお話します。

常設展示のご案内

鬼瓦
胆沢城跡
外郭南門出土
（９世紀）

今から1200年前に作られた胆沢城と古代東北蝦夷をテーマにした展示を行っています。発掘調査成果や、出土した遺物をご覧ください。

●開館時間／9：00～16：30（入館は16：00まで）
●観 覧 料／個人300円（団体15人以上は半額料金）
小・中・高校生　無料
●休 館 日／火曜日・12月29日～1月3日

VR体験コーナー　胆沢城の当時の姿をCGで再現しました。

映像コーナー

『古代東北蝦夷の世界』上映

古代東北の歴史を100インチのスクリーン映像で紹介。

上映時間	9：30～15：30の
30分	1時間ごとに上映

2階展示室入り口

展示室入り口にたたずむ鎮兵（ちんぺい）の像が、訪れる人を出迎えます。

鎮守府 胆沢城
第120号
令和7年5月20日発行

編集・発行
奥州市埋蔵文化財調査センター及び胆沢城跡歴史公園指定管理者
一般財団法人奥州市文化振興財団
奥州市埋蔵文化財調査センター
〒023-0003 岩手県奥州市水沢佐倉河字九蔵田96-1
TEL 0197-22-4400　FAX 0197-22-4600
URL　http://www.oshu-bunka.or.jp/maibun/
E-mail　maibun@oshu-bunka.or.jp

私たち一般財団法人奥州市文化振興財団は、
〇感動を創り、感動を共有する歴史・文化・スポーツの活動
〇心豊かな子どもを未来に翔たかせる文化・スポーツの創造
を事業理念に掲げ、取り組んでいます。